筑紫哲也が愛した河井寛次郎

ジャーナリストとして活躍した筑紫哲也さんが亡くなって６年余り経つ。早いものだ。筑紫さんなら、いまの世の中、とりわけ政治状況について、どう発言されるであろうか、と考えたりする。また、朝日新聞バッシングをはじめとした、ジャーナリズムの危機的状況についても、筑紫さんに聞いてみたい。人気を集めた「多事争論」での筑紫さんを思い起こす。

件名と写真は、朝日新聞 2014 年 12 月 9 日夕刊「京ものがたり」である。「若手記者時代は、永田町で政治家に張り付き、特ダネ競争に明け暮れる日々。違和感を感じ、記者を辞めようと思い悩んでいたという。そんな折、沖縄への辞令を受けた。1968 年、33 歳だった。祖国復帰運動の取材で多忙を極めたが、文化や遊び心が溶け込んだ生活、沖縄人の温かみや強さに触れ、人と話すことが好きになっていった。」

京ものがたり　筑紫哲也が愛した河井寛次郎

「手考足思」響き合った信条

ある日、一個の茶色のつぼを貯金をはたき購入してしまった。「つぼの作者は、大正から昭和にかけて活躍した陶芸家、河井寛次郎。特別な美、豪華さの美ではなく、暮らしにある手仕事の日用品の中に美を見いだした。」

「筑紫もくらしに立脚し、頭だけで賢しげに考えないことを戒めとしていた。歩き、人に会い、話を聞く。その繰り返し。ありふれた日常こそが、かけがえのないもの―。あのつぼにひかれたのは、姿形だけでなくその信条が響きあったからだろう。筑紫はその後、年に数回は清水寺近くの寛次郎記念館を訪れた。『手考足思』。苦手な色紙を頼まれると、寛次郎のこの言葉を書いた。手で考え、足で思う。『陶工に限らず、私のような仕事もこの通り』。著書にそう記している。」

「筑紫が記念館を最後に訪れたのは、08 年 2 月の夕暮れ。毛糸の正ちゃん帽をかぶって、ふらりと姿を見せたのを、寛次郎の親族は記憶している。再発した肺がんの治療中。亡くなる 8 カ月前のことだ。柱時計の音が響く、囲炉裏のある居間。40 年来の定位置の椅子に腰掛け、いつものように、無言で 1 時間ほど過ごしていたという。」

京都に行った折に、筑紫さんを偲ぶためにも記念館に行ってみたい。

（2014 年 12 月 15 日）